

創刊 1946年2月1日 第3種郵便物認可  
平成19年9月1日発行 毎月1回 1日発行  
俳句雑誌 沖 第28巻第9号



俳句雑誌「おき」

9  
月号

沖  
発行所

# 脚力

能村 研三

吟行の楽しみ

品川宿吟行 三句

片陰や列士の墓の小さかり

シャツターに広重図絵の波涼し

炎天の宿をたよりのまちおこし

葛巻いて古城のごとき給水塔

「沖」は昔から吟行が得意でない結社というイメージがあった。人間を詠む、人事句を詠むという傾向が強かったのも起因しているように思う。それを払拭する意味でも、「沖」では、全国大会的な要素をもった「勉強会」という一泊二日の鍛錬会と、東京句会の担当で年に四月と八月の二回を吟行会に当てている。

四月の吟行会はいつもお花見の時期にも当たるので、桜の咲く処が選ばれることが多いが、今年は上野の旧岩崎庭園が吟行地となった。四月の句会場はいつも定例で使っている大久保の俳句文学館なのだが、八月は俳句文学館がお盆休みのため使用できず、東京都内の他の会場を探さなければならぬ。句会の幹事は数カ月前から下見に行ったり大変である。

今年は石川笙児さんをはじめ東京例会の幹事の皆さんが大変お世話になった。特に今回は品川宿が吟行地であったため、家が近くの石川さんが事前に区役所に行き街案内のガイドブックを買って来るなど、用意周到であった。この吟行地は、おそらく俳句をやっていないければ、わざわざ

船腹の溶接火花秋立てり

新涼や家霊棲みたる書架の奥

山の名を讃へてをりし祭鱧

乗り換えの階の脚力秋立てり

曖昧な川の水城葛の花

稿ふたつ進めて汗の噴く日なり

ざ行くことはなかつたと思う。東京の身近にもまだまだ魅力的な処がたくさんあることを知った。

品川宿は、江戸時代の諸街道のうち最も重要視された東海道一番目の宿場であった。北品川から青物横丁にかけて旧東海道沿いにある寺や史跡を巡ったが、地元の人を中心にまちおこしが行われ、まち歩きマップが作られていたり、お休み所なども整備されていた。

「沖」は吟行会になるといつもの例会を越える人が参加して賑やかな会となる。これも俳句をする仲間たちと同じ風物を見学でき、共に創作ができることから人気があるのだろう。今回は初めて参加される方も多くて楽しい吟行会であった。

能村 研三



# 空の華

林 翔

二十四年前の日記

去年は、九十二歳とは思えぬほど元気であつたが、今年九十三歳になつてからは体調が思わしくなくて、句会指導も幾つか休んでしまつた。それくらいだから、長年続けていた日記も誌さなくなつてしまい、淋しい思いをしている。

梅雨入かな舗道に下駄の音響き  
するすると蛇は繁みへ走り梅雨

海と空いつわかるるや梅雨曇

風に揺れ色は濃くとも夏衣

長年と言つても実際はどれくらいかと調べてみると、昭和五十八年、西暦一九八三年からであつた。自分は一九一四年生まれだから満六十九歳、教える年では七十歳で、いわゆる古稀に当たる。この年から日記をつけ始めたのは、もしかしたら古稀を意識したのかも知れない。

今日は七月二十八日、その日の頁を繰ると、奇しくも能村ひろ子夫人（登四郎氏夫人、研三氏の母堂）が逝去された日だつた。

午前三時四十五分、能村ひろ子夫人、東京医科歯科大学病院にて逝去。六十四歳。第一報は佐々木

遠回りするも本能餌曳く蟻

花火師の労を思はむ空の華

雨音の彼方秋雷かそけくも

初秋やまるまるとしてちぎれ雲

蝸や顧みて坂まだ半ば

その彼方久遠はありや秋入日

君から入り、続いて悦子さんから入ったが、悦子さんは泣きながらの報告であった。

石笛句会指導日。句会を終えた足で能村家弔問。一旦家に帰り、夜、通夜に参ずる。弔句の色紙を捧げた。

梅漬けてあかりし手も蓮の上

当日の日記は以上であるが、右の句は勿論、登四郎氏の名句、

梅漬けてあかき妻の手夜は愛すを踏まえている。

なお、悦子さんとは、現主宰研三氏の夫人である。

林 翔



# 蒼茫集



投入れ 松井のぶ

断崖に投げ入れのごと岩つつじ  
ががんぼのまことしやかな脚のぼす  
葱坊主きよく正しく十五列  
味噌蔵へ風のかよひ路夏つばめ  
今はただ目ぐすり恃み梅雨さなか

籠 枕 中尾杏子

いのちかかも日暮燕のまつしぐら  
うつそりと胸に火抱くや蚊喰鳥  
はへとりぐも壁に座標を失へり  
検査着の裾丈合はぬ水中花  
メロン食む詮なきことばふやしつ  
潮退くは血の引くごとし籠枕

父の決断 小山田子鬼

挽ぎ初めは父の決断さくらんぼ  
泣き虫のむかしありけり螢狩  
繭を煮る鍋の大いさ柿若葉  
俳縁といふ奇なるもの夜の蛙  
骨太の匂ひ垂れぬる栗の花  
花火師の張りつめし気の川面来る

正 座 千田百里

五時起床六時泰山木ひらく  
山開き富士も正座を解きにけり  
本棚はことばのいづみ紙魚の宿  
マニキュアの重さう青水無月の指  
四万六千日俳句文学館まうで  
シヤガールの愛の絵褪せず巴里祭

櫂 八本 北川 英子

烏賊火燃ゆ戦艦いくつ眠る沖  
野外劇果つや星座の揃ひみて  
仏生る石工の汗の幾条に  
星なき夜の明けて河骨殖えぬたり  
棘柔きうち紅花摘む曙光  
朝焼けて湖面に揃ふ櫂八本

反 骨 辻 美 奈 子

白地着て父に古武士の気骨あり  
蝸牛反骨の巻きありしかな  
でで虫の眠りの渦へとちこもる  
いとけなき紺の水着のおろしたて  
ほうたるの闇より螢とり出だす  
風すこし選り蒲公英の絮とべり

蘭館絵巻 荒井千佐代

海へ出船三句向く涼み処も大砲も  
紙魚はしる蘭館絵巻屠殺の図

大夕立かびたん部屋で遣り過ごす  
さきぶれの夏越し太鼓や駆けゆかむ  
茅の輪抜く海への落暉そびらにし  
海山の闇の重なる茅の輪かな

歳 月 安 居 正 浩

歳月は散る舟虫のやうなもの  
命終のきらめきとなる囀  
少女色して日本のさくらんぼ  
残すこと忘れたきこと夏の雨  
還暦を過ぎたる水着干しにけり  
若沖を見て炎天に切れ目なし

空中散歩 河 口 仁 志

細心にして大胆に蛇出づる  
太陽をわがものとして朴咲けり  
畦塗りの終の一打は平手打  
囀逸る気負ひを掴み出す  
切株に噴き出す樹液梅雨入前  
新緑の空中散歩リフトかな

# 潮鳴集

蓮開花

杉本光祥

佐保姫の手鏡ほどの山上湖

七十路は老の序の口朴の花

涼かぜや詩聖の像に涙して

昔昔草堂

ちぬ釣や黒潮に息合はせつつ

蓮開花急に空気の軽くなり

夕端居

伊藤真代

きぬさんやちよさん案ず夕端居

七夕や師は相生の天上華

いち日の齡のリズム水を打つ

緑蔭の木椅子孤独の抛りどころ

まくなぎの住み継ぐ荷風旧居かな

さみしき水

掛井広通

噴水はさみしき水のシュレッター

麦秋の沸点雲のなかりけり

透き通るとは梅雨冷えの傘の中

遠雷やボタンの多き炊飯器

滝上る鮎心臓を熱くして

けふ大暑

林昭太郎

パレットの翼を虹へひらきたる

ひんやりと耳朶のありけふ大暑

滴りの巖を打つたび巖新た

得心のいつて吐き出す枇杷の種

スプーンに金属の味梅雨兆す



# 沖作品



## 能村研三選

長崎

阿部 順子

山百合の斑の獸性を切りにつけり  
炎帝へ象は鼻より近づきぬ  
火の山の氷室をふかく抱きをり  
石鹼の泡つんとたつ河童の忌  
海の日のからりと乾くポプリかな  
シャンデリアのどこも正面アマリリス  
鍬形虫の闘ふときの無重力  
インターホンとれば激しき梅雨の音  
ハンカチを巾着にしてもらふ菓子  
大理石の階涼し博物館  
一斉に標高上ぐる山若葉  
耶馬杉の闇のあをめき初螢  
梅雨の鯉屈託のなき口ひらく  
噴水の音の定型寂しくも  
日傘ふどうれしきときは回しをり

東京

小嶋 洋子

大分

吉武 千束

神奈川

堀口 希望

薫れるは泰山木か宇涯の忌  
波音に消さるる祝詞海開き  
万太郎句碑のほそ字も梅雨じめり  
孫の世のことは分からずさくらんぼ  
河鹿鳴く室生寺の諸仏眠らせて  
サンガラスうしろすうすうしてゐたる  
緑さすふらんす堂の小冊子  
かたひぢの覗く車窓や五月晴  
定位置で食べる弁当雲の峰  
時の日の雑巾ぎゆつと絞りたる  
水も樹も匂ふ安曇野夏はじめ  
万緑や地球のどこか軋む音  
さくらんぼ寄り添ふ二つ眩しかり  
鉄塔に青蔦宇宙研究所  
じやんけんの石包む紙日焼せり

千葉

篠藤千佳子

東京

藤原はる美

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

山百合の斑の獣性を切りにけり 阿部 順子

山百合の花は、優雅にお辞儀しているかのようにつく。茎は細い大きな花を支えていて、頭でつかちな植物でバランスは悪い。野外にあっても芳香を漂わせ、室内に飾るとけふるような濃い匂いがする。山百合の特徴のひとつに花びら一杯に散らされた斑点がある。一見そばかすのようにも見えて、グロテスクな感じもしないではない。それを作者は「斑の獣性」として捉えた。私も「朴の芽の鳥科植物とも思ふ」という句を作ったことがあるが、植物自体にも何か動物的な性質を持ち備えていることがある。

インターホンとれば激しき梅雨の音 小嶋 洋子

最近ではほとんどの家庭でインターホンが普及していて、押している人の映像が見えるテレビ付きのインターホンなどもあ

る。マンションなどでは、セキュリティの関係で一階の出入り口がロックされていて、インターホンを通じて、室内と連絡しつつロックが解けて中に入れる仕組みになっている。この句も玄関のインターホンから居間のある部屋までの距離はかなりあるのかも知れない。外の音も遮断され、インターホンが鳴って初めて外の音が聞えてきた。梅雨の激しい雨の中を訪ねてきたお客様を一刻も早く家の中に入れていただくよう案内した。

噴水の音の定型寂しくも 吉武 千束

噴水にはいろいろな種類があつて、多種多様な演出が出来る。時折、高さが変わったり、変化を楽しむものがある。しかしここに詠まれた噴水はよく公園などにある極めて単純なものなのだろう。何の変化もなく、常に一定の水量を噴出しているのである。この句、噴水の前で待ち合わせでもしたのだろうか。待ち合わせの人が中々来ないこともあつて、噴水の景も見飽きてしまった。中七の「音の定型」とは、さすがに俳句をやる人の言葉の使い方なのである。

薫れるは泰山木か宇涯の忌 堀口 希望

かつての「沖」の重鎮、今泉宇涯さんを詠んだもので、宇涯さんが活躍されている頃には堀口さんは「沖」にまだ入っていない時だったので、不思議にも思ったが、生前連句の関係で指導を受けたことがあるそうで、人と人との付き合いの広さを感じた。今泉宇涯さんは長く「沖」の同人会長を務めた方で、平成十年六月二十八日に亡くなった。「沖」の草創期の運営にご尽力いただいた方で、泰山木の花のように大きな器の方で多くの沖人に影響を与えた方でもある。

(以下略)